

オリンピック・ムーブメントにおける「新しい社会運動」構想

環境問題に対する女性の取組みを中心としてー

新井喜代加(筑波大学大学院), 近藤良享(筑波大学)

キーワード: オリンピック・ムーブメント, アジェンダ21, 新しい社会運動, 女性の位置

IOC(国際オリンピック委員会)は、環境問題への取組み及び持続可能な開発の推進のために、スポーツと環境委員会を設置し、「環境問題への貢献策」を講じている。IOCは、1992年に公布された「環境と開発に関するリオ宣言(以下「リオ宣言」)」を実施に結び付けることにより、オリンピズムの目的とする「世界平和」の実現に近づけると判断して、1999年にオリンピック・ムーブメントのアジェンダ21を策定した。オリンピック・ムーブメントのアジェンダ21には「主要グループの役割の強化」という項目が設けられ、そこでは、オリンピックムーブメントが、「持続可能で公平な開発に、女性の参加を奨励するグローバルキャンペーン」を7つ目的「1女性のスポーツ振興、2従来女性のスポーツだと考えられた競技種目を、他のものと同様に扱う。3特に教育の中核ともなる地域スポーツ活動センターの活動を通じて、女性の教育を推進する、4女性がスポーツに参加しやすくなるような託児所などの社会的な手段を発展させる、5男女のスポーツ実施を公平にマスコミが取材し、経済的にも公平に扱う、6競技運営団体において、女性が責任のある地位につけるよう奨励する、7関連国際団体と共同活動の機会を増す」を掲げ支援するとしている。つまり、この規定のもと、女性はオリンピック・ムーブメントにおける環境問題への取組みに貢献する役割を担うことが期待されているのである。

本研究は、環境保護及び持続可能な開発を支援するオリンピック・ムーブメントにおいて女性が具体的にどのような役割を担う可能性を秘めているのか、「新しい社会運動」の視点から探求しようとするものである。

「新しい社会運動」とは、長谷川によると「1960年代以降に先進産業社会で顕在化してきた、環境・エコロジー運動、女性運動、平和運動、学生運動などの性格を、在来の労働運動との対比でとらえ、フランスのトゥレーヌやドイツのオッフェら、ヨーロッパの社会運動研究者が規定した概念であり、「新しい社会運動の現代的性格をめぐる彼らの議論は『新しい社会運動論』とよばれ、アメリカにおける資源動員論とともに、今日、社会運動

論の中心的なパースペクティブとなっている。」長谷川は、オッフェの「新しい社会運動」の特性を四つの側面、「(1)行為主体、(2)イシュー特性、(3)価値志向性、(4)行為様式」から把握し、それらの側面から、「女性の果たす役割が大きい」反原子力運動、とりわけ日本のそれについて考察することによって、女性の動員促進の要因と、反原子力運動にみる「新しい社会運動」の性格を明らかにしている。また、そこでは、「(1)行為主体」について、「新しい社会運動の代表的な担い手は、女性や青年、エスニシティにおけるマイノリティ・グループなど、近代産業社会の『周辺的存在者:』であり、『自由と平等』という近代的な理念の及びうる範囲から実質的に排除され、自己定義できるアイデンティティを奪われてきた存在者である」と捉えている。

「新しい社会運動」における「行為主体」としての「女性」の在り方は、オリンピック・ムーブメントの女性として捉えることを可能にするような特質をもっているのではないだろうか。近代産業社会の産物である近代スポーツは、「自由と平等」の象徴と捉えられがちであるが、実際には、男性にとって男性性を発揮する絶好の機会であり、男性主導によって展開されてきた。よって、女性は、スポーツ界の周辺的存在として扱われてきた。

スポーツ界において女性が男性に対して周辺的な存在として、「新しい社会運動」的な性格をもったオリンピック・ムーブメントを展開し得るか、その可能性を求めたい。

研究の手法として、オッフェの「新しい社会運動」の4つの性格を把握し、この四つの観点からこれまでの女性によるオリンピック・ムーブメントの展開、とりわけ環境問題への取組みについてオリンピックに関連する文献資料やIOCが発行する文書などを中心に考察する。また、先述の長谷川による著書を援用し、女性動員の促進要因及び環境問題への取組みが「新しい社会運動」の性格を持つ過程あるいは持ち得る過程について検討を加えたい。